

新約聖書の教会共同体のディアコニーの構造 (翻訳)

山城 順**

Die diakonische Struktur der neutestamentlichen Gemeinde Diakonie-biblische Grundlagen und Orientierungen (Written by Eduard Schweizer)

Jun Yamashiro

「新約聖書の教会共同体のディアコニーの構造」
エドゥアルト・シュヴァイツァー

目 次

1. 極度の障害の中にあるディアコニー
 - 1.1 特殊資料のルカ22章27節c
 - 1.2 苦しみを受ける奉仕
 - 1.3 仕える務めをなしえない、奉仕
 - 1.4 使徒の職務
 - 1.5 殉教する奉仕
2. 困難を自覚している奉仕
 - 2.1 直接法的教え
 - 2.2 自分を仕えさせる奉仕
 - 2.3 目立たないものの効き目
 - 2.4 間違った、自分を仕えさせること
 - 2.5 宗教的浪費
 - 2.6 社会に参与する教会共同体
 - 2.7 イエスのように仕える
3. すべて信じるものの奉仕
 - 3.1 奉仕の本質的一致と開かれた多様性
 - 3.2 階級序列なのか? 自然または超自然的な賜物?
 - 3.3 職務
4. 模範的なキリスト教の奉仕
 - 4.1 他者のそばにいて仕える奉仕
 - 4.2 言葉に使える奉仕、説教は上位に置かれた奉仕なのか
 - 4.3 奇跡によって保証された言葉
 - 4.4 従属する奉仕
 - 4.5 上座(かみざ)を愛する体
 - 4.6 天使の奉仕とイエスの奉仕、弟子たちの内部
 - 4.7 奉仕 イエスの弟子全てが食卓の用意をする奉仕
 - 4.8 「小さい者」
5. 世に対する兄弟姉妹としての奉仕
マタイのモデル
 - 5.1 「小さい者」の教会共同体
 - 5.2 ペトロの特別な奉仕
 - 5.3 奉仕のすべてに組み入れること
 - 5.4 宣教する奉仕
6. 世に対する兄弟姉妹としての奉仕
パウロのモデル
 - 6.1 キリストの体
 - 6.2 新しい創造と新しい神の民としての体
 - 6.3 賜物〔カリスマ〕と制度
 - 6.4 宣教する奉仕
 - 6.5 牧会書簡
7. 世に対する兄弟姉妹としての奉仕む
ヨハネのモデル
 - 7.1 新しいイスラエル
 - 7.2 職務を見うしなった 教会共同体か
 - 7.3 新約聖書の新しい可能性
 - 7.4 宣教する奉仕
 - 7.5 言葉だけでなく実行する奉仕

注
解題

新約聖書の教会における奉仕の仕組み

エドゥアルト・シュヴァイツァー

1. 極度の障害の中にあるディアコニー

1.1 特殊資料のルカによる福音書22章27節c

「私はあなたがたの中で、いわば給仕〔口語訳では「奉仕」〕をする者である」とイエスはルカによる福音書22章27節で言っている。^[1] この句(27c節)は、24-26節と27節で、教訓を含む着衣式をしたあとで語るというようなものではなく、最後の晩餐で、イエスが語った言葉に結びついている。^[2]

この言葉は、〔当時イエスが語っていた〕アラム語で、どのように書かれたのかは分からないが、ギリシャ語で書かれた最後の晩餐の最も古い伝承は、マルコによる福音書10章45節にある。そして、ギリシャ語動詞の「奉仕する」(ディアコネイン)は、ヘレニズムの影響^[3]を示している。また「多くの人の身代金」という言葉は、イザヤ書53章を想起させる。^[4]「あなたがたの間で仕える者」(会食仲間において同様)というモチーフは、贖罪の意味をもって、19節以下^[5]の食卓の言葉に結びついている。

もっと古い伝承であるヨハネによる福音書13章には、さらに気になる事情が語られている。イエスが弟子たちの足を洗ったのは、食事の前でなく、その後で(2-4節)、あるいは食事の間(26節)で行われている。これによって洗足の話は、ルカによる福音書22章27節cの古い言葉をあとから加えて説明したと考えるべきである。^[6]

だが、ルカによる福音書22章27節c〔私はあなたがたの中で、いわば給仕をする者である〕は、特殊資料の中にイエスの奉仕を描いたもので一つの古い伝承である。

1.2 苦しみを受ける奉仕

イエスがどのように「ディアコン」の「仕えること」をしたのか、興味深い。たしかに、イエスは、弟子たちと最後の晩餐を共にした時、一つの比喩を語っている。しかし、彼は何をしたのだろうか。なにもしてはいない。イエスが弟子たちに

給仕の奉仕をしたとは、どこにも書いてない。食卓の仲間が椅子にいる時、彼は「最後の道行きの途上にいる」。日没時には、その死の一日が始まっていた。ことは終わりにむかっていて、何もできない。苦しむことだけができる。彼は最悪の事態に陥っていた。弟子たちにいくつかの言葉を語るだけで、ことは急速に終わりに向かっていた。この状況は、非常に印象的な様式で証言を語っている。

つまりイエスは、神が彼に負わせたものを、苦しんで負うという大きな奉仕を、弟子たちと共にしているのである。このことは、27節から生き生きと展開している。なお、イエスは彼が仕える存在であるということと、「偉大な者」ではないという、二つのことが確認できる。彼は、自分の存在をとおして、今おこっているすべてを、つきつめてその反対に裏返す。ここで彼は、(「支配」するような)力をもっているのではなく、また(25にある「慈善家」のような)名声をもっているわけでもない。ここで、イエスは無力であり、とりわけすべての人からあざけりを受けて死ぬことが決まっている。

1.3 仕える務めをなしえない、奉仕

イエスが語ったことをまじめに受け取るならば、通常の意味でディアコニーの奉仕を引受けることができないような強い障害を持つ人が、弟子たちのなかで行っているディアコニーの奉仕こそ最も重要である。ところで、〔本稿〕2.1で、弟子たちに教えるルカによる福音書22章24-26節の、イエスの言葉に移る前に、簡単に弟子のことを描写しよう。

弟子たちの周辺には、敬虔な人から、主の埋葬というディアコニーの奉仕をした最前列にいる人たちがいる。その中で、弟子たちは全員何もできない。一人の部外者〔ニコデモ〕がしている。

四つの福音書のすべてによると、弟子たちはゲッセマネの園で逃亡した(マルコ14:50、マタイ26:56)。裏切るペトロはいつもイエスの外見だけであることを言っている(ルカ22:54-62、ヨハネ18:15-27)。十字架につけられた時には、弟子たちは誰

もいなかった。その時ヨハネによる福音書19章26節は、イエスの愛弟子という、おそらく12弟子^[7]には属していない、匿名の弟子をあげている。今日のルカによる福音書の文脈には、パンと杯の言葉と、仕えるイエスと弟子たちに関する言葉との間に、ユダの裏切りの予告がある。その場合23節には、弟子たちは全員そこから逃げていて、彼らは責任を他に転嫁することはできない。そして、すべての福音書は、弟子たちがもう一度「自分はイエスの弟子ではないと」拒絶することを予告していて、ペトロの場合は特に印象的である。^[8] その予告は、実際には起こらなかったが、見え隠れしながら、教訓をむきだしにして、読者には恐ろしい実例となっている。

イエスが、教会共同体の中で、人のためにいることは、まず、目にみるように明らかなのだから、もっと前に、彼は自分自身をその「実例の」中に見出すべきである。

1.4 使徒の職務

パウロの場合、上述のことは次の事実に対応している。即ち、彼が目指したものを妨害し、しばらくのあいだ不可能にした経験、それが彼にとって決定的であった経験、その「奉仕」(1コリント4;1「しもべと管理者」)が本質的な性格をあらわしているところの経験に対応している(1コリント4;7-13、2コリント4;7-10)。その経験の中で、使徒は自分を「神のしもべ」(1コリント6;4以下)として証する。また弱々しさも、話が下手であること(2コリント10;10)も、神のしもべに属している。「日々死んでいる」とは、奉仕の務めをうけたパウロの真の姿である(1コリント15;30-32)。これは、彼がなしえた、驚くべき成果といえる。

彼はことがらをよく見ている。日々死んでいるとは、瞑想して起こっているのではない。彼は獣と戦っているかのように、絶えず危険に遭遇しているのである(32節)。またパウロは自分を「未熟児」と見ており、「使徒のなかでもっとも小さい者」(1コリント15;8以下)といい、彼が模範的なキリスト者と見られているときは、「聖なる者たち全ての中で最も小さい者」(エフェソ3;8)、

または「罪人のかしら」(1テモテ1;15)とも言っている。

パウロが「イエスの死」について語る時、彼は体のことを思っている(2コリント4;10)。また、「(イエスと)共に苦しむ共同体」について語る時、その中で彼は「彼の死に似たものとなる」(フィリピ3;10)、彼は自分を洗礼の時の霊的な体験(ローマ6;11)に限定しないで、実際の人生経験を述べている。コロサイの信徒への手紙1章24節によると、パウロは「あなたがたのためにキリストの苦しみの欠けたところを、身をもって満たしている」と言っている。これは彼の奉仕を定義している(1;23.25)。^[9] それとともに苦しむ勇気について、また忍耐について述べている。それだけでなく、彼は実際に持病に苦しみながら福音を信じさせられているのである。^[10]

1.5 殉教する奉仕

コロサイ信徒への手紙がパウロの死後書かれたとすれば、殉教死は可能性としてでなく、使徒の苦難における事実を含んでいる。このことはイエスの死を目の当たりにすると容易に理解できる。そしてマルコによる福音書10章38節以下は、従うようにという招きの具体化として、弟子達はキリストの証人として死ぬと予告している。そのなかで「奉仕」(43節)の役割は、強い信仰から生まれる特別な業績をとまなわなくてもできる。使徒言行録には、アクセントはもう一つの別のところにある。

殉教者を賞賛したからといってなにも得るものはない。

パウロはこれらのことを報告してはいないが、20章29節に前提されていて、実際に教会共同体が迫害によって生じる困難を語っている。エルサレムからサマリアへの出発は、民族世界への新しい出発であり、それは最初の殉教者の死を通して始まった(8;1-4)。実際に、その時、「偉大な奇跡やしるし」は起こらなかった。「恵みと力ある行い」も「彼がその中で語った知恵と霊」を生じさせるということではなかった(6;8-10)。

サウロが、死をおそれない勇気を賞賛すること

によって、心を揺り動かされ、キリストへの道を見出したということは、7章58節によると、そこから心理学的なものへと再建することもできるが、何も書かれてはいない(18;1,3)。ここで殉教は称賛されてはいない。

ペトロ第一の手紙4章17節は、教会に始まった神の法廷を確認している。

パウロはテモテへの手紙第二4章6～8節に、彼の死が近づいていると積極的に語っている。

また黙示録2章10、13節は、大迫害の時代に！キリストのために死んだ人は、信仰における命の冠を受けると約束されているが、実際には、終末の完成に向かうまで大声で叫んでいるということを確認している(6;9-11)。^[11]

2. 困難を自覚している奉仕

2.1 直接法的教え

ここから、われわれは新約聖書がイエスの弟子たちについて(直接法で)何を語っているかを整理しよう(1:3-5)。なにが障害といわれているのか、また何が奉仕をできなくしていると言われているのか。そのすべてでは一人の責任に帰するのか、または自分が処することを心得ていない弱さに帰するのか、ということは大きな問題ではない。私たちが、今、イエスのディアコンについて教えている教訓的な枠組に目を向けるならば、実際に教えは直説法で教えられた事が命令にかわることはない。ルカによる福音書22章24節は「弟子仲間の中で誰がいちばん偉いか」という問いを直説法ではじめ、この世における関係を直説法で語っている(25節)。そのことについて次のように言っている。「あなたがたはそうであってはならない」。「仕える者になりなさい」は命令であるが、27節で、イエスは彼らの下にいる。そして弟子たちが何であり、何であろうとしているか(29節以下)ということを28節に語っている。それに対して、マルコによる福音書10章43節は、「あなたがたの間ではそうであってはならない」と、断言を挿入している。

次に「あなたがたは仕える人となる」は命令ともいえるが、それ自身は直接法である。

フィリピ2章5節にくり返されている受肉したイエスの自己卑下は、直説法で告白されており、教会共同体は新しく生きる自分の位置を定めている。使徒は「キリストにあって」何が現実であり、何であるべきかを語っている。「私たちの間でも」そうであり、同様に、あなた方も行い、共に生きるべきである。^[12]

いくらかは一つの領域からもう一つの領域に現実を置き換えることが含まれている。

それゆえ、1-4節においても同様に、ある人をディアコニーの奉仕をする主語とし、他の人をその相手として受け入れるべきだというような呼びかけがなされるようなことは全くない。

キリストの現実は、彼らと共に働き、同じように生き、思い、感じ、考える。実際に、すべてが「下に」あり、他の人を尊重する、ということだけが言われている(2;2以下)。

2.2 自分を仕えさせる奉仕

しかし、どのようにして実践的な生の領域に自分を「移動」するか。ルカによる福音書22章27節によると、イエスは「仕える者」として自分を示すとき、彼がこの役割について口にしたことを受け入れている。彼はそれに反して、とめない。ののしらない。それについて嘆かない。逃げ去ることはないかと、ためさない。またあきらめない。彼はその役割を自覚して是認している。

そのため、彼は自分を仕えさせられる者とする必要がある。ルカによる福音書8章3節は、自分の持っているものをもってイエスに仕えている婦人について言っている。マルコによる福音書15章41節は、ガリラヤですでにイエスに仕えていた婦人たちと、一方ではエルサレムに上る道中で従っている婦人との、区別があること認めている。おそらくペトロの姑も、イエスと彼の弟子仲間に「仕えた」と言われているから、そちらに属している(マルコ1;29平行)。^[13]

ヨハネによる福音書12章2節(ルカ10;40と比較)によると、マルタはイエスに「給仕をし」、12章26節にはイエスの弟子たちは「仕える者」として書かれている。

2.3 目立たないものの効き目

イエスの弟子は、仕えることによって新しい存在に変えられたことを認識していただろうか。していなかっただろうか。

キリストにあって、あなたがたは「共に生きるもの」であるから、「あなたの方の間ではこの世と同じようであってはならない」。即ち、あなたがたは、イエスがあなたがたに「仕える者」であり、あなた方に対してイエスがすでに自分を放棄してしまった者である。

イエスが弟子たちの足を洗ったという洗足の時(下記7.5)、ペトロの決定的な間違いは、イエスの行動を手本として見つめ、仕える用意がないということではない。そうではなく、彼自身が仕えさせられようとしないうことであり、彼がそのような奉仕の必要に全く気づいていないことである(ヨハネ13:7以下)^[14]。ここから、教会共同体の手足をむすび、それによって明らかになることは、彼ら自身が助けられねばならないという、今まで聞いたこともないような重要なことが明らかになる。彼らは、自分が助けられねばならない、そのようなものとして、教会共同体の構造を新しく形づくる。

彼らが本当に受け入れられるところでは、教会共同体の「キリストのかたち」^[14]の何かが形になりはじめていのである。^[15]

教会共同体は、イエス自身が貧しさと弱さの中で生きたそれ自身であり、以前はできた働きをいまは妨げられているものであり、まさに神の前で「仕える」ように言い、また自ら仕えさせることができた、その仕えるそのものである。

2.4 間違った、自分を仕えさせること

文字通り、地位を高めるために仕える、間違った方法に、自分を仕えさせることがある。

イエスは言われた。「人の子は仕えられるために来たのではない。(あるいは自分に仕えさせるためにではなく)、多くの人の贖(あが)ないとして、命を与えるために来た」(マルコ10:45 = マタイ 20:28)。このことは「支配」しようとする間違った態度を放棄させる。

間違った自己一奉仕をさせられることは、受けるものがそのような奉仕を必要としているかどうか、あるいは彼に責任を負った奉仕を、当たり前と理解しているかどうかということによって特徴を表している。

間違いは上下の区別を強調する(異教的)構造にもある。^[17]そこで、「支配」する(マタイ20:25)。又は「私を支配するために」(マルコ10:42)。「上から下へ支配する」(ルカ22:25による)。慈善家としての尊敬を受けようとして行う。

マルコによる福音書10章42節が、とりわけ、そのような支配者であって、イエスでない者が、全く異なったとりきめを世界に定めようとする幻想を、あばこうとする時、ルカによる福音書22章25節は、より早く権力の行使や名誉欲を発揮しようとする人の貪欲を強調している。

イエスの共同体が「力に満ちている」と信じ、その教会政治によって、進めてきた選挙から強制回宗にいたるまで、福音伝道を励まそうとしたり、イエスのふるまいに照らして、何度も批判するということをしないで、一定の社会的教説による、平安や、あるいは政治的党派を期待するならば、それらは異教的構造に再び陥ってしまう。

2.5 宗教的浪費

しかし、また、誤ったありかたを厳しく見抜いて、自分を仕えさせる改善もある。ペトロは、ヨハネ福音書13章8節以下のイエスの言葉について語っている。すなわち、謙虚は救いにつながっていること、救いを贈り、イエスによって提供された洗うということ、弟子たちも行うようにさせられることである。ところが、彼〔ペトロ〕は模範的な方法で行おうとして、足と同じように手も頭も洗ってもらおうとする。彼が受けている試みは、聖礼典(サクラメント)を頻繁に受ける宗教的な人を、非宗教的な人であるかまたは半宗教的な人から区別する、「宗教的な」単なる(精神的)浪費である。人は、彼の主がしてくれる奉仕により頼む、新しく理解された生を、言い表すことを求められているのではなく、量的に量ることができる教会によって管理された〔聖餐式という〕手

段の力を信じる信仰を求められている。ペトロが一度は下の座に着いた時も、聖礼典（ sacrament ）を執行する人が高く、同様に、受ける人は低いという異教的な構造はかわらない。洗足で満足するか、そのことを断念するか、この位置が彼と他との境界を定める。それゆえ、両者の誤った可能性は幻想(2;4)として、またはお金の単なる浪費としてでなく、そのことによって、教会共同体を施しをする者としたり、受ける者としてだけ正体をあらわすのであってはならない。そうではなく、弟子たちの中でイエスが働きかけたことが、何であるか、そのことについて語られるべきである。浪費（ヨハネ13;8以下）は模倣（12-17）されるべきものとなる。

2.6 社会に参与する教会共同体

ルカによる福音書 22章27節と、より詳しくはマルコによる福音書10章45節で、イエスの奉仕について語っている。

第一は、これらの奉仕の意味をよく述べていないということがある

しかし、イエスが語り、またこの役割を認めているという事実は、彼が神の意志を見出しているということを含んでいる。24節から27節b の枠の中に新しい秩序が基礎づけられ、可能になっている。

15から20節の関連は、人が再び神に立ちかえるために、奉仕の中でイエスの贖罪がおこっていることを認識させる。^[18] このことはマルコによる福音書10章45節で明確に保持されていてイザヤ53章10-12節を手本にしていると思われる。

ヨハネによる福音書13章6-8節によく似た考えが表されている。それはイエスの死とよみがえりのあとで完全に理解されるようになるのではあるが（7節）、イエスは見せかけの関わりではなく、〔関わりの〕しるしを、彼固有の実存に与えている。とりわけルカによる福音書22章24-27節において、イエスの奉仕は食卓の祝いの中に固定されている。ここで、奉仕について、来るべき終末に完成することについて、この言葉はアウトラインを語っている（15-18,28-30）。

このことはヨハネによる福音書13章（例えば4節また12節）についてもいえる。ここで、イエスの体と血について、恵みのしるしとしてのパンとワインについて何も言われていない。^[19] しかし、6章

51-58節において、また1章29節においては、19章34-36節におけると全く同様のことを示している。^[20]

この「イエスの生の座」は教会共同体を強く保っている。

教会共同体は、聖なる場所を知らないしまた聖なる人を知らない。もっとよく言えば、イエスに従うすべてのものは「聖なるもの」であり、地のすべては主に属している（1コリント10;26）。

しかし、教会共同体は、自分の周りに集めるために、そこに共に集まってくる「一つの場」として、準備された食卓を知っている。^[21]

新約聖書全体で、座長については何も語っていない、そしてパウロが唯一コリントの教会共同体で晩餐の祝いについて語るとき、自分を祝いの指導者または総裁にしているのではなく、そこに集められた教会共同体についてのみ話していることは、新しい教会共同体の構造の本質的なしるしである。^[22]

2.7 イエスのように仕える

イエスの存在とふるまいも同じように、食卓の仲間全体、また弟子の一団の存在とふるまいを定め、新しい構造を作り上げている。この三つ箇所（ルカ22,ヨハネ13,マルコ10）がある。弟子たちへの勧告は、その新しい存在と新しい行動を導く。フィリピ2章6-11節の「キリスト賛歌」は、教会共同体の中で共同生活を大切に、実践するための行動を教えている。その場合、イエスが、問題であり、すべての怠惰とすべてのエゴイズムに反して実現されるべきである。直説法と命令の結びつきも、また示している。勧告は根本においては、「キリストにあって」すべてを明らかにするために、信仰に呼びかけている。

それ故、服従の教えは、人がイエスのあとに従い、自分を彼のそばへ導き、贈られる、そして「倣

う者」となる。^[23] さらに、次の事は本質的である。「あなたがたの間で」(ルカ22;16参照)というキーワードが一般に使われている、「あなたの方の中で」は27節、マルコによる福音書10章43節以下、フィリピ2章5節で使われている。すなわち、次のことが肝要である。個人が個人にとどまるのではなく、教会共同体の中に身をおき、外面的には積極的に施す人、または受身的に受ける人は、人からなにかを言われる事なしに、自分の信念から他者に伝えているように見えることが肝要である。

3. すべて信じるものの奉仕

3.1 奉仕の本質的一致と開かれた多様性

教会共同体の中で起こっている事の全ては、血筋〔Herkunft〕の視点から、また能力〔Befähigung〕の視点から見ることができる。そのとき「恵みの賜物」として示される(カリスマ)。あるいはグループ内を分類する視点から、またグループに対するオープンな視点から、他者に対する慈しみは「奉仕」(ディアコニア)として理解される。また、現実は何が起こっているのか、どのようにして働きかけているかという視点からみると、その時「業」(1コリント12;4-6、エネルゲーマ)と呼ばれる。

第一の視点は、ルカによる福音書22章24-27節、マルコによる福音書10章42-45節そして、ヨハネによる福音書13章1-17節において、イエスの行為にしっかりむすばれている。第二は、弟子たちに「仕える」という言葉の真実に、あるいは互いに足を洗いあう「洗足」の形態である。第三は、イエスの弟子たちの中に失われた委託が明らかにしている。それゆえ、弟子たち自身がこれらの奉仕をしなくてよいというような場所はどこにもない。

イエスは、弟子たちを派遣する際、これに対して宣教と、悪霊払いと、救いの、全権を授けた。(マルコ 6;7、12以下、マタイ10;7、ルカ9;1、6を見ると、その時、救いは悪霊払いとして強くあらわれている；ルカ10;9、Q、悪霊払いは実際マルコ10;8でそう呼ばれているが、ルカ10;9はそう呼ばれていない)。

ヨハネによる福音書20章21-23節によると、罪の赦しの力を含んでいる。イエスを超えて弟子たちがおこなう「偉大なわざ」(14;12)とは、救いの奇跡や力あるわざ、あるいは、それらをまねたものではない。そうではなく、その中で初めてキリストに対する決断が十分に可能になる復活後の時の中で、教会共同体の形成の働きが示されている。^[24] その行為の周辺は〔そのものが〕、純粋な言葉のようなものを超えた意味において、もういちどひるがえって宣教となる(下記4.3)。

ルカによる福音書22章、マルコによる福音書10章における「仕える者」のもとにある言葉と、ヨハネ福音書13章における説明は、なによりも仕えることの中で顕著になった、活動の基本型だけを強調している。

食卓でなす奴隷の給仕に関する典型的な言葉の選択〔Wahl〕は、とりわけ、目に見えるような姿は、洗足のなかに、この奉仕を性格づけている。それに具体的に肉体化し、実践的なものであって、定義するというようなものではなく、どんな方法でも行うべきものである。

いずれにせよ、宣教された福音は一つであって、そのかぎり奉仕の本質的なかたちである。全体との狭い関連、とりわけ死に際してイエスがたちむかった態度は、「～のための存在・Pro-Existenz」^[25]の性質と、他者に対する存在に、はっきり出ている。どんな様式の中でこのことがあらわれるのか、外に向かってより強く積極的にあらわれるのか。あるいは、受身的にあらわれるかは、まだはっきりしていない。

3.2 階級序列なのか？

自然または超自然的な賜物？

多様な奉仕があることは、特にパウロのリストにはっきり示されている(ローマ12;6-8、1コリント12;8-10、28-30)。

a)その奉仕が、本当に神によって与えられたものかどうかを判別する基準は、「人間的なものを超えた」力を経験したとか、はなばなしくあらわれたり、秩序を離れてしまうことにあるのではない。

コリントの人は異教的な文化のなかで、すでにこのことを経験してきた(1コリント12;2)。事実の判断基準は、キリストを主と告白し、教会共同体がたてられているかどうかにある(1コリント12;3、7と14;1-5)。

それゆえ、異言は神の賜物と認められる。だが、説教は一覧表の、首位にはなく、どちらかといえば、末尾に置かれている(12;10、28;30、14;6-25)。

- b)ローマ信徒への手紙12章6から8節の一覧表には、癒しと力あるわざのように、異言を語ることが欠けている。

いま、賜物〔の一覧表〕は、たしかに、典型的なものをあげているのだが、それは〔異言解釈してわかるようにするという〕完全なものにしないであげている。異言を語るという普通でない奉仕はいかなる状況でも、それは明らかに教会共同体の命に属しているものではない。

- c)少なくとも階級はない。

コリント信徒への手紙第一12章28節は「使徒」「預言者」「教師」を1.2.3. と、リストの初めにあげている。他の奉仕者は、後に分類されている。

ローマ信徒への手紙12章6から8節には、これに反して「教える人」のみがいわれているように思われるが、それについては、「勧める人」「施す人」「指導する人」「慈善を行う人」が含まれ、一方では「預言者」と「奉仕者」があげられている。患者や、助けを必要とする人に、実際に奉仕がなされる時(上記4.2.と 注35)、彼は、教える人であり、神学教師も同様に奉仕者である。

- d)最後に、「援助をする人」そして「管理する人」(アンチレンプセイスとキベルネシス、1コリント12;28)の異なったやり方も、これらの奉仕に属している。30節に〔みな特別な賜物を持っているのではないという〕欠けていることが示されているように、〔異なったやり方は〕望まれることではなく、努力されるものである。人は、超自然な賜物と自然なものを区別することはできない。たしかに人は知らされ、経験した

出来事の中で、まれに区別することはできる。すべての奉仕は、たとえば未開民族に見られるように、たいていの人が埋没している自然なものである。もっと適切に言うことができる。神の霊が彼の中に働く時、すべての奉仕は超自然的である。それは神の指示のもとでおこり、また愛する能力が人に生じるとき起こる。人が病人にスープを料理をするということのなか、また教会共同体の会計処理に疲れるということの中でも起こる。

3.3 職務?

施すことと、そうする任務の違いは、認識されなければならないし、また整理されなければならない。人は制度化された奉仕を、他から区別して「職務」と呼ぶことができる。このようことはたとえば、一生という長い間でも、或いは短い間でも起こり得る。「ステパノの一家は聖なる者の奉仕のためにつくしてくれた」(1コリント16;15以下)。人は誰でもこのような方法で努力し自分を下に置くべきである。

第二に、パウロのところに一度限りの旅をしてくれた奉仕は評価されなければならない(18節)。また礼拝で二人または三人の説教者又は預言者に語ってもらうという、奉仕の機会が与えられるべきである。その際、聖霊は制度を突き破ることがあるということは大切なことである(1コリント14;27-30)。

このことは、教会のすべての手足が礼拝に貢献できるということを排除しない(26節)。

実際に、礼拝の中で説教者は秩序を守ることをもとめる。しかし、また例えば看護のためにおくられる人、またはその家を会合に用立てる人は、とうぜん他の人に知られるべきであり、すなわち「制度化」される。とりなしの奉仕を行う者は、そのことは神のみが知っているものでなければならない。奉仕の重要性和尊厳については、制度になっているものも制度になっていないものも区別はない。それに「公の」承認など必要としないとりなしの祈りこそ、教会共同体全体にとって大切な働きとなりうる。^[26]

「職務」について当時のギリシャ語には四つの用語があった。テロス（完全という意味）、アルケー（指導という意味）、ティメ（尊厳という意味）、レイトルギア（自由意志で受けづかれた公共への出動という意味）

最初の言葉のほかは、新約聖書のすべてに、それぞれの意味で出ている。だがユダヤ人とギリシャ・ローマ人の職務についてだけであって、キリスト自身、また時々教会共同体に関しては、キリストの職務という意味が入っている。^[27]

その代わりに世俗的な、聖書にない、奉仕するという動詞・diakoneinと語幹が同じものが選ばれている。すでにこの動詞は、イエスの弟子たちのすべての奉仕に記されている。70人訳聖書にはそれが欠けていて、当時の教会共同体の聖書にも欠けている。

「奉仕」と「奉仕する人」という名詞は、エステル書のなかにまれに見られる。ソロモンの箴言10章4節と第4マカベア書9章17節に見られる。実際、純粋に世俗的な奴隷とその働きについて、特に食卓のそばでする給仕に用いられる。

この言葉は、新約聖書時代の後期ギリシャ語で、また神に対する奉仕という意味で、使われるようになった。（ヨセフスの場合）奉仕は、ユダヤ教の祭司がする奉仕に使われている。^[28]

それでも、だいたい世俗のものであって、聖書に使用されたからといって、あがめられる用語になっていくのではないということが非常に目立つことも事実である。なお驚くべきことは、私たちは「職務」と呼んでいることについて、他の言葉がないということである。^[29] また、同様に奉仕が、教会共同体で、「教える人、世話する人、監督する人等々」と呼ばれて区別されるようになったことであり、しかし、制度となったもの、あるいは特別と思われる奉仕を、他から区別するような言葉がないということである。

儀式を通して「参加する人を」しるしをつけたり、つけなかったりする才能(Begabung)は、その組織された奉仕、また組織によらない目につく奉仕を、「宗教的なもの」または、宗教的に「より高い」と評価する領域のなかに格上げするものでは

ない。神の霊からくる才能と能力、それは、「主」の意味を他に伝える。また、神の創造の驚くべき力(1コリント12;4-6)は、世俗の行いを、神から出て、神のためになす奉仕となし、神の国の働きへと高めていく。

4. 模範的なキリスト教の奉仕

4.1 他者のそばにいて仕える奉仕

ここから、信仰者はみなそのような「奉仕者」であった。しかし、今や、フィリピ1章1節に初めて、「監督と奉仕者」が、並んであらわれる。かつては同一で^[30]、分かれてはいなかった。^[31] おそらく、按手を受けて教会共同体で働く人と、聖餐の祝いで働く人の、二つのグループがあり、役目の区別があったかどうか分からない。使徒行伝6章1節以下によると、「日常の奉仕」のために「食卓に仕える人」と「神の言葉」の宣教に仕える人と、区別がされていた。^[32]

ここで食卓に仕える奉仕は、あの七人に委ねることが使徒の大事な課題となった。こうして彼らの中から選ばれたステパノは、奇跡を行う人として、また説教の委任を受けて登場する(6;8-10)。そして、殉教の死も引受けた。選ばれた七人は、すべてギリシャ語の名前をもっていたという事実は注意を引く。ステパノの死後、教会共同体への迫害が始まる。使徒たちは落ち着いていることができ、反対されずにエルサレムに滞在している(8;1)。というのは、迫害を受けているのは教会共同体のギリシャ語を話すヘレニストだけである。そこにユダヤ教の律法と文化を批判する多くの人たちがいる(6;11-14、7;48-53!)。また、12人の使徒たちは、アラム語を話す人たちを指導している。その時、七人すべてはヘレニストのグループの責任者であった。

ルカによる福音書は、アラム語を話す保守的なイエスの信者と、ギリシャ語を話す進歩的な信者との間に緊張があり、監督と奉仕者を区別し、言葉の宣教者と、社会的に働く奉仕者の間にある緊張を記している。

エルサレムの原始教会の中に、いくらかは自立し共存して生活できる人たちがいて、二つのグルー

プがあったということを、これ以上正確にいうことができない。いずれにしても、七人の「奉仕者」または（監督）とよばれる使徒たちと、後でディアコニーの意味でよばれる奉仕者の区別は、はっきりしていない。イエスの信者がユダヤ人の共同体の中にまだ生きている間、他のグループとの間に葛藤があったとするならば、ステパノのグループに対して、ヘレニストの会堂に所属する人たちがいたことを、考慮する必要がある。すなわち、ユダヤ人の教会共同体に世話を必要とする貧しい人がいて、その世話は中でなされていた。そして外国語を話す貧しい人が、周辺にいた。^[33] その時、これらのグループが、寡婦の権利についてなんらかの尽力をしたことは考えられる。また、葛藤の中で奉仕することによって、イエスの信者たちに融和が生じたということも、ありえる事である。^[34] いずれにしても、アラム語を話すイエスの信者たちと、ギリシャ語を話すイエスの信者たちの間に葛藤があった、またその近くに、進歩的に考え生きる人たちもいたことは歴史的に言えるのである。ユダヤ教の会堂の中に二つのグループがあって、彼らの区別がはっきりした後、オープンになってきたのかどうかということは分かるだろうか。もちろん、多くの会堂がエルサレムにあり、それぞれの特徴をもっていた。しかし、ルカによる福音書の時代の報告は、言葉の奉仕と食卓の奉仕とは区別があったと言っている。

4.2 言葉に使える奉仕、説教は上位に置かれた奉仕なのか

言葉に仕える説教という奉仕は、使徒言行録6章2節と4節によると、使徒にゆだねられている。食卓に仕える奉仕は使徒以外の人に委ねられたが、これは特に重要である。教会共同体は、まだ制度や、どのような階級もないが、その中にも、パウロが数えあげた賜物〔カリスマ〕がある（上記3.2）。一つの奉仕といくつかの言葉の奉仕が初めからあった（ローマ 12:6:「預言」^[35]、1コリント12:8:「知恵の言葉」「悟りの言葉」、1コリント12:28:「使徒」「預言者」「教師」）。

そこで説教するという言葉の奉仕がより高く、食卓に仕える奉仕は重要性が低いことがあるのだろうか？ ある意味で重要度の差があるということは正しい。というのは、教会は言葉にもとづいて生きるのだから。イエスは「言葉」を宣べ伝えた（マルコ2:2、4;33、8;32）。「種をまく人は言葉をまくのである」（マルコ4:14）

「イエスのことばを聞き、そしてそれを行う」人は、岩の上に家を建てる（マタイ7:24、Q）。「初めに言葉があった」そして「言葉は肉となった」（ヨハネ1:14）。

「十字架の言葉は・・・、救われる人には神の力である」（1コリント1:18）。

「この言葉は信頼できる」（1テモテ1:15 上記）。

「神の言葉は生きている」（ヘブル4:2）。

「生ける神の言葉によって」信じるものが生まれる（1ペトロ1:23）、そして、再び来たりたもうキリストは「神の言葉」といわれる（ヨハネ黙示録9:13）。

パウロがコリント信徒への手紙—12章31節で論理的ではないが、「もっと大きな賜物」について語るとき、彼は14章1節によって具体的には、教会共同体の建設のために特に重要な、預言を考えている。というのは、預言はかかわりのない人たちを説得して、キリストのもとに連れて来るからである（14:24以下）。

4.3 奇跡によって保証された言葉

いま、次のようなことが付け加えられる。マルコによる福音書によると、Q資料も同様に、イエスが弟子たちに委託したことは、宣べ伝えること、癒すこと、また悪霊払いをすることである（マルコ6:7、12以下、マタイ10:7、9、上記3.1）。^[36]

またパウロの「言葉と宣べ伝えること」は「霊と力が見えること」の中に（1コリント2:4）、行われ、彼は「言葉と行いに、しるしと奇跡の力の中に、霊の力の中に」（ローマ15:19）、そして「使徒のしるし」は教会共同体の中で、「しるしと奇跡と力ある行いの中で、すべて忍耐する人」（2コリント12:12）に自分を示す。

ヘブライ信徒への手紙2章4節によると、神は宣教

の言葉を「しるしと奇跡と多くの力ある行い、そして、聖霊の分与」とおして示す。そのことについて、使徒言行録は繰り返し書いている。言葉の宣教に説教者を任命する場合、純粋な言葉の知識化を行ってきたが、それより強い真の奉仕を上置いてきた。確かに、言葉の宣教と、目に見える行いにあらわれる言葉の委任、との共存は、食卓の奉仕と言葉の奉仕のように同一のものではない。言葉はしるしのように、目に見えるが実際的には助けないということと、言葉の性質を持っているが、実際に助けるすべての奉仕と逆になるということと、この二つの区別が棄てられることは、本質的な、そして注目されるべき事である。

4.4 従属する奉仕

ペトロの手紙一4章10以下は、異なる賜物〔カリスマタ〕があるというパウロの見解を受け入れている。

「監督たち」の奉仕と「奉仕者たち」の奉仕との、奉仕の発展はほぼ一致する(上記4.1フィリピ1;1)。これはテモテの手紙一3章1-13節において明らかである。^[37] その場合テモテの手紙一5章1-20節、長老はユダヤ人の共同体ですでに知られていて、テトスの手紙1章5-7節によると長老と監督は同一のものであり、事情によっては、同一化していたと思われる。

「監督」は働きのしるしである、ということは明らかである。この言葉は単数形ででてくる。その場合、「牧師を任命するのは魂の配慮のことがのぞまれている」ように魂の配慮という奉仕が考えられている。

長老は公の名称である。^[38] また、ユダヤ教から引き継がれた長老制と、監督／奉仕の組織は衝突したと考えられる。この際、そのもとには監督をもつ家の教会がすでにあった。牧会書簡の著者は、監督が教会共同体の指導を行っていた制度を気に入っていた。^[39] 監督という称号は、もともとギリシャ語を話す地域で「注目をあつめること」を表す、純粋にこの世の言葉であった(上記注31)。同様に、長老という称号はユダヤ人の地域からでて、引き継がれている。それはまさに寺院や、文

化やシナゴグの礼拝と共に引き継がれたのではなく、行政で継承されてきた。^[40] それゆえ管理者の賜物、また行政を行う者の賜物、それは得ようと努力して得られるというようなものではない(1コリント12;28-30, 上記3.2 d)。しかし、あとで、奉仕者を制度にしたことは、奉仕者の従属を示している。とりわけ、言語のかたちも、影響している。「監督」と「長老」は接頭語の「auf」と比較の形「alter(より年配の)」ものであるが、弟子たちはより年配でない「弟子たち[弟子=junger=より若い]」(ルカ22;26、使徒5;6、1ペトロ5;5!)。一方「奉仕者」はその語幹から、座っていて食卓には仕えない「偉い人」(ルカ22;27)ではなく、「奴隷」(マルコ10;43以下)に対する並行概念であり、「小さいもの」(ルカ22;26)である。

奉仕者は下位におかれて、まったく非キリスト教的な発展をしてきた。そしてそれと共に、なお純粋に組織的な援助活動は、教会の序列のより低い段階に位置づけられた。^[41]

4.5 上座(かみざ)を愛する体

まず、上座が初めからそう呼ばれていたのか、あとから呼ばれるようになったのか、どちらなのかという問題がある。牧会書簡の著者はなにか気がとがめられるものがあるようにみえる。というのはテモテの手紙一3章13節に、彼はよい奉仕者は「よい地位」といって教会共同体におけるよい場所の権利があるという。パウロは、「もっと大きな賜物〔カリスマン〕」について語っているところで、コリントの人たちにすべて「優れた道」(1コリント2;31)^[42]を示そうとし、愛の賛歌(1コリント12;31)を書いているが、大事なことである。^[43] そのなかで、愛がより強く出て、他の奉仕をこえて、言葉の奉仕のほうが優れているということはない。「もっと大きな賜物〔カリスマン〕」として位置づけることは教会共同体を形成するためには必要で、とくに賜物〔ガーベン〕は必要であった。そして教会共同体は変わる! たしかに教会共同体は、家がなければ集まることはできない。しかし、宣教しないで、洗礼も聖餐もなけれ

ば、生きることはできなかった。それでも迫害の時代に、礼拝の集会のために、自由に使うように部屋が用意され、そこで正しく、文字通りの説教がなされ、効果的な証がなされていた。コリント信徒への手紙一13章で賞賛されている愛は、それをなすためにはなんと具体的で、繰り返し解放されていることだろうか。今も！

4.6 天使の奉仕とイエスの奉仕、弟子たちの内部

カファルナウムでの第一日目（マルコ1;21-34）、イエスがしたことについて異なる反応があった。悪霊にとりつかれた男は「神の聖者」と告白した。ルカによる福音書では(4;41によると)「キリスト」と告白している。イエスが沈黙を命じた悪霊たちはイエスを「神の聖者」「神の子」と告白した(マルコ1;25,34)。群衆の評判は、病人たちを引き寄せた。彼らはイエスの中に奇跡を行う人だけを見ている(1;28,32)、イエスはそこを逃れる(1;35-38)。だが、その中に、一人の婦人、ペトロの姑がいる。ペトロの姑は、特に印象的な救いを体験したわけではない。熱が引いたのである。しかし、彼女は神に出会った悪霊たちがしたような教義的に正しい告白をしてはいない。そこで、彼女はイエスの群れに「仕える」。その未完了過去形は一定の継続を示している(上記注13)。このことは、「奉仕」が、ディアコナート・奉仕職を意味しているのか、婦人のした事柄を意味しているのか。宣教を意味しているのか、または男がうけた委任のしるしを意味しているのか？ 婦人たちの「奉仕」は、すべての福音書が報告している(マルコ15;41、マタイ27;55、ルカ8;3、ヨハネ12;2)。ディアコノス・diakonosという呼び名が生まれたのは、一人の婦人フィベによっている。(Diener〔奉仕者〕ローマ16;1以下)^[46] 彼女たちは、男たちと同じように、イエスに「従った」ことが言われている(マルコ15;41)。

マタイによる福音書28章9節以下と(ヨハネ20;10-16)によると、復活者は婦人たちに現われている。またすべての福音書によると、復活の知らせは、まず最初に彼女たちに語られた。その後、彼女たちが弟子たちに伝えている(マルコ16;6以下、平

行記事ヨハネ20;1以下、17以下)。

天使に「仕え」られた(マルコ1;13、マタイ4;11)。またイエス自身、仕えるために来た、と言った(マルコ10;45、ルカ22;27、参考としてヨハネ13;4以下)。〔目を覚ましているという〕あの不可能な奉仕をして、主人が帰ってきたときに目を覚ましていた僕に、主人は給仕する(ルカ12;37)。来るべき主はこの世と反対の「奉仕」をすると語っている。同様に再臨のすばらしさが見える！婦人も同じように、男がする事をしている(マルコ9;35,10;43、マタイ20;26,23;11,25;44、ルカ22;26、ヨハネ12;26を参照)。上座はどちらかという問いは、ここで解決する。

4.7 奉仕 イエスの弟子全てが食卓の用意をする奉仕

告知も、宣教の言葉、また教会の説教、あるいは使徒書簡も同様に、教会共同体に委ねられた任務である(上記4.2)。

これに対して奉仕はその信仰に依頼されたものである。奉仕しない人は、教会共同体の手足であることはできない。もちろん弁舌の才がなければ語る奉仕はできない。奉仕は教会共同体の構造をさだめ、それとともに教会共同体の存在をさだめる。愛がない、感情だけがない、受け入れられない愛の形は、すべて空しい(1コリント13;1-3)^[45]

それゆえ、弟子と女弟子は根本的にイエスの奉仕者であり、奉仕者として任命をうけたことを模範的に生き(ルカ22;26、マルコ10;43)、弟子が約束したことを生きる。

4.8 「小さい者」

弟子であるということは、目に見えることであり、奉仕をとおして世話をすることは、基本的にその世話人であることを忘れない。「小さいもの」という弟子の尊称は、マタイによる福音書の共同体制度の特徴であり(マタイ18;3,10;14)、イエスに戻っていく根源をもっている。「これらの小さい人」(信仰をもった人)^[46] につまずきを与えた人は、首にひき臼をつけられて溺死せねばならない(マルコ9;42、マタイ18;6^[47]、ルカ17;2)。マ

タイによる福音書18章6節には子供についての文章が引用されている。また5節(マルコ9:37と平行記事)がある。ルカによる福音書17章2節は、世界的な「つまずき」に近いことを語っている。マルコによる福音書9章38-41節には偽の悪魔払いの記事と、イエスの弟子に一杯の水を差し出した人に、あなたのことは忘れないと約束して締めくくられている。マタイによる福音書10章42節の、約束を受けた「このような小さいもの」という表現は、弟子たちの派遣の話とつながっている。「この小さいもの」という言葉は子供をさしているが、イエスの弟子たちにも用いられている。^[48] イエスの比喻では、初めは「小さい者」は弟子たちであるが、あとで子どもに転用された。ある意味で本当だと思われる。

5. 世に対する兄弟姉妹としての奉仕

マタイのモデル

5.1 「小さい者」の教会共同体

教会共同体が、具体的制度のなかで「小さいもの」を強調することは、正しいどうか。正しいければ、どのように正しいのかという(二つの)問いがある。

マタイが小さい者(上記4.8)を強調するのはショックを与える発言である。というのは、空腹のとき、渇いていたとき、亡命していたとき、裸のとき、病気の時、囚人であったとき、キリストに聞き届けられたこと、また人々に出会ったこと(マタイ25:3,5以下、42以下)、また、私たちの意味で「奉仕・ディアコニッシュェ」(44節)が彼に出会ったことが、彼が何をしてくださったかを一度だけでなく知っている^[49](37-39)。マタイによる福音書にだけある特別資料に現われる。

それ以後、マタイによる福音書は18章3節にこの言葉を置いている。マルコによる福音書10章15節は子どもの祝福のペリコーペの中にこの言葉を引用している。(孤児の)子どもを受入れるようにという言葉の前に置いて〔マタイ18:〕4節によって強調している。それは同時に、「教会共同体の制度」の始まりの合図をなしている。即ち、人がいかに子供のようにあるかということは、子供は

なんでも人からするようにいわれ、自分で自分を養うことができない。彼が神の国に入ろうと願うならば、贖(あがな)ってもらふことがゆるされているし、そうしなければならない。

第二に、「小さいもの」は危険にさらされないように見守られる(5節)。そういう子どもであるという、最高の文章である。ここで教会共同体^[50]は、明らかに兄弟姉妹として考えられていて、子どもは贈りつづけられて、受身的に贈り物をする人に加えられるように尽力する。その教会共同体は上座にいる人と下座にいる人の区別を捨て、すべてを「奉仕者」にする(23:8-11)。

5.2 ペトロの特別な奉仕

そのような表題によって限定された教会共同体の中の賜物が出番を待っているということは排除されない。

教会共同体のなかに、うけた賜物の一覧が出てくる。

実際に、長老も監督も、あるいはマタイが模範とする、律法学者、著者ですら、自分自身をそのような〔賜物を受けた〕者と理解していた(13:52)。なお預言者もそうである(23,34、10:41)。ペトロは特に重要である。彼には特別な任務が与えられた。ペトロの務めは律法学者の部類に属する(16:17-19)。「結び、解く」とは、ユダヤ教の教師が、ある状況の中でどのような掟を結び、どのような掟を解くのかを明らかにする。安息日に犠牲をささげなければならない祭司は、安息日の労働の禁止を、守ることができない。そのような場合には罪の掟の違反を解き、他の場合は結ぶ。

この言葉は違反者を教会共同体から排除したり、再び受け入れる時、呪縛をかけたり、はずすという意味をもっている。^[51] この奉仕を行う能力は、マタイの場合、明らかに律法学者のような人にあるのではなく、28章20節によると、イエスの教えを知る知識や守る伝統に属しているのではあるが、また、ペトロはあらゆる面で、生き方を問う役割を演じる場所に新しく挿入されているのであるが、^[52] 奉仕を行う能力は信仰である(17節)。^[52]

5.3 奉仕のすべてに組み入れること

だが、任務は一つの枠の中で、ペトロにかかっている。5章11-17節^[54]によると、「あなたがたより前の預言者たち!」とあるように、ペトロより以前に、弟子たちは預言者の職務をはじめている(マタイ5;12)。ここに16章17-19節^[55]と同じ構造がある。^[56]「すなわち(ホティ)」という句で「あなた方に言う／あなたがたは・・・である」、そのあとに、直説法の(「塩」「光」「岩」である)という比喻で、二人の祝福が書かれている。また「あなたの天の父」／「私の天の父」は5章16節／16章19節にある。同じく掟を「解く」は5章19節／16章19節にある。それとともに「天国に受け入れられる」／「天国の門が(開かれるか閉じられるか)」は5章20節／16章19節にある。ペトロの任務によると18章18節以下、そこで同じ「結び、解く」約束が教会共同体^[56]に授けられている。^[57] すなわち、教会共同体の内に異なる賜物と任務がある。すべての人が預言者に任じられて、結んだり解いたりする全権を受けたのではない。すべての人は、正しくは、奉仕者が占めていた。(下記5.4)このすべての価値ある任務の中にペトロも組み入れられていて、同じ約束を示されている。

5.4 宣教する奉仕

マタイの宣教指令28章16-20節は、イエスが教えた掟の中に、弟子たちがさらに教えるべき掟の中に、イエスがいかなる時も現実に生きていて、弟子たちに約束している。それゆえ、マタイによる福音書はマルコによる福音書と違って「(同じ)御国の宣教」を強調し(4;23、9;35、24;14、マルコ13;10を参照)、あるいは、少なくとも「この福音」を補い(26;13、マルコ14;9に対して)、そのためにマルコによる福音書 1章1、14、15節、8章35節、10章29節(16;15)のような立場で「福音伝道」を導き、福音が復活後のキリストの知らせ全体を理解できる基礎的宣教を語る。^[58] 教会共同体は、山上の教えのなかで「律法に勝る義」(5;20)を、本質的なものとして要約している。弟子たちが「行い」「満たす」(5;17-20)ように、イエ

スの倫理的な告知を更に進めて、宣教的に働く。その際^[59]、隣人愛の呼びかけは、マタイでは区別されて、中央に置かれている。確かに、安息日の掟は、一人の生命を救う場合をのぞいて、きびしい様式のなかで保持される(24;20、マルコ13;18に対して加えられている)。しかし、隣人愛は「根本原理」である。それは個々の全体を支配し、それを解く。それは料理の指示をうけて働くような、その下で苦しむような「根本原理」である(15;10以下パリサイ派の教えを実行することによって、またペトロの強調することを力説する)。

細則の上に国の憲法あるように、5章17節と7章17節にある愛への呼びかけは、山上の教えの真髄を定めている。そこから祝福、そして警告などの細則が続く。黄金律(7;12)は掟の問題(5;17)を解く。その時、掟は「律法と預言者」であり、イエスは「解くのではなく、満たす」と言った。隣人愛の掟は、22章39節以下にある神の愛に等しい。そして「律法全体と預言者たちはこのことに基礎づけられている」。次は19章19節において同じように、聖書の句が挿入されている。神は「犠牲ではなく、憐れみを欲している」(9;13と12;7)。「奉仕」も、そのようにしたのか、しなかったのかを判定する法廷と同様に「裁かれる」(25;44、特別な善; 参考:23;11のマルコに関して)。^[60]

6. 世に対する兄弟姉妹としての奉仕

パウロのモデル

6.1 キリストの体

パウロは教会共同体をキリストの体^[61]として理解している。コリント信徒への手紙—12章12節で、パウロは「体は一つでも、多くの部分からなり、体の部分の数は多くても、体は一つであるように」という長い前置きをして、「キリストも同様である」と簡潔に締めくくっている。そして、この比喻は直接的証言のために離れ去る。その代わりに、この世では、教会共同体の「体」のなかに、キリスト自身をかたちづくる。この体の中に信者は洗礼され、この体の中でユダヤ人とギリシャ人、奴隷と自由人の区別は消える(13節)。^[62] 14-26節でパウロは体について生き生きと語っている。

しかし、人はこれらの比喻を本当に見なければならぬ。彼は次のような劣悪な感じ方を問題にする。即ち、耳は体の一部である。耳は自分を守らないが、髪の毛で隠して、体の一部にとどまる。もちろん、誰でもその人を目で見ないのであって、耳で見るのではない。しかし、一つの体は、それが目だけ巨大であれば、おそろしい失敗作となる。その時、問題は、自分の分を超える事にある。つまり、広いところを見渡す目は、見つけた汚れを洗う手でなければならない。この比喻から27節を結論的にのべている。「あなたがたはキリストの体であり、また一人一人はその部分である」。第一に、本当に現実とは、体の現実があり、第二に体の一つ一つの部分の現実がある。^[65]その際、22-25節はこの比喻を超えていく、比喻の中では外見の部分を、衣服でいっそう美しく飾ることを強調している。そこで、比喻は離れ去り、神は彼に大きな栄誉を与える。一つが苦しむと全てが苦しみ、一つが喜ぶと全てが喜ぶ、一つが尊敬されると全てが尊敬するという、よく使われる句(26節)は、かえりみられない部分を、全体の中で受け容れるか、あるいは受け容れないかという、教会共同体の苦しみ、また喜びにつながっている。

6.2 新しい創造と新しい神の民としての体

この話の出自は議論の余地がある。^[64]話の根本にあるグノーシスは安全ではない。ヘレニズムの万有神は、天またはロゴスを世界の体の頭として紹介している。ここから、パウロは教会の起源を翻訳し、キリストを頭としている。^[65]一方、コロサイ信徒への手紙1章15-18節^[66]には、ヘレニズムの宇宙観が行き渡っている。またはパウロが普遍的なものとした基本的立場は、ヨハネによる福音書15章の民と族長の統一性(下記7.1)を形成している。というのは(ヨハネ1; 51にあるように)ヤコブからイスラエルが生まれたという考えではなく、アダムに始まる新しい人が生まれたと考える。万有の神観は、まずコロサイ信徒への手紙に働いている。おそらく異なった要因が結合しているが、国家が国民に協力を求めるという、政治的な必要がある。ストアに見られ

る体についての生き生きとした譬は、コリント信徒への手紙一12章15-22節に影響を残している。いずれにしても、「キリストの体」についての話のなかに、新しいヤコブからイスラエルが生まれたという考えは、イエスによって新しい神の民が誕生し、天に挙げられたキリストによって、宇宙的世界のなかに新しい創造が始まったという考えと、合流している。

6.3 賜物〔カリスマ〕と制度

全ての霊的な賜物と全ての奉仕(上記3.1-3)について、基本的見解の一致が大事である。それは教会共同体の建設のために、一定の賜物と奉仕がなによりも重要である(上記4.5)。

パウロには、カリスマと制度との本質的な矛盾はない。^[67]

彼は、カリスマの持ち主すべてを、厳密な意味で一つの霊を通して一人の神から贈られた贈り物と理解していて、彼は初めからその自己絶対化を防いでいる。彼はそれを教会制度の枠の中に置いて、公共の機関にありがちな、変化を失ったものになることを防いでいる。^[68]

そのように、共同体の手足の特別な働きが評価されるべきである(上記3.3)。他者を評価する者は非常にわずかであるが、逆に、見栄えのしない部分が、大きな注意と尊敬を受取るべきである。(上記6.1)

6.4 宣教する奉仕

これらの奉仕のすべては、教会共同体内だけで考えることはできない。もちろん、パウロ自身にもあてはまるのであるが、キリストによって「彼の名のために、信仰に従い、全ての民のもとで」働くために、恵みと使徒職を受けた(ローマ1;5)。「彼を民に知らせるために」(ガラテヤ1:16)、パウロが影響を残したところだけに黙示録の図式があらわれる。^[69]長く隠されていたが、全ての民に明らかにされた秘義が、語られる(ローマ信徒への手紙16;25-27、コロサイ信徒への手紙1;26以

下、エフェソの信徒への手紙3;3-7)。しかし、手足のすべての奉仕は、これらの宣教の局面を繰り返し受け入れることが重要となる。「部外者または不信仰者」は、その試金石のためだけにいるのではない。神から受けている特別の賜物は（1コリント14;16以下、23-25）、教会共同体の壁を意識的にこえて外に準備されなければならない賜物である（ロマ12;13-21）。パウロ自身、「ユダヤ人に対してはユダヤ人のように、律法なしに生きる人には律法なしに生きる人のように、すべての人に対して、すべてのものになった。彼らを得るために」（1コリント9;20-22）。

ペトロの手紙一 2章9節-3章17節で、すべての教会共同体の手足が、祭司として話しかけられているが、それは「民族の間を旅する人たち」という(2;12)旧約聖書的な唯一の個所が特に印象的である。また「言葉なしに」(3;1)信仰を持たない同胞や、男と夫婦を、キリストのために獲得するというところが、特別に印象的である。

6.5 牧会書簡

牧会書簡は、少なくとも女性教職を排除しているという問題がある(1テモテ2;12,上記注62)、またグノーシスの危険が明らかにされていると言える(6;20、2テモテ3:6)。

テモテの手紙にある勧告（2テモテ1;6）は、神の賜物〔カリスマ〕が再び燃え上がること、それはパウロの按手によって彼にくる。だが、その按手の儀式により恵まれる。そこが他と区別される。その教会共同体の指導者が按手をするができる。

按手は、長老の全員によって、「預言者」または「預言に基づいて」なされた（1テモテ4:14）。すなわち、預言者はテモテに按手をするように指示している（1:18）。

「自分の職務をよく実行している長老たち」特に、
 宣べ伝え、そして教えて働いている人は、二倍の
 栄誉をうけるべきであるという時、金銭の報酬が
 考えられていた (5:17)。

グループが組織なしに長い間生きることにはできない、ということは自明のことである。

その奉仕を整えることは教会共同体の使命である（上記3.3）。制度が次のことを示しているかどうか問題である。教会共同体は、つきつめると、この世と価値が逆になる。彼は、通常の期待に反するような場合であっても、信じることを叫ぶ。そして、神の自由は彼を守ってくれるだろうか。

「預言者」が実際に定められているところでは、奉仕に招かれる人は、教会共同体も、本当に祈り、そして神に聞いてもらえるようにさせられる。そこでは、特定の組織に対して何も言わない。そのような教会共同体は誘惑から自由である。つよく姿をあらわす奉仕の誘惑、「まなざし」の誘惑、また人が彼の手を純粹に保つことができない誘惑、「耳」そして「手」の誘惑から自由である。教会共同体は、その中で一つの奉仕しかなかったり、二、三の奉仕しか中心にないような教会共同体は失敗作になることを知っている（上記6.1）。

7. 世に対する兄弟姉妹としての奉仕

ヨハネのモデル

7.1 新しいイスラエル

イエスは「私は新しいぶどうの木、あなた方はその枝である」とヨハネによる福音書15章1-5節で言っている。彼は、すべての弟子が同じように、そこに結ばれているぶどうの木であり、彼ら〔弟子たち〕が彼にとどまるならば、彼は彼らにとどまり、彼らは実を結ぶことができる。

「ぶどうの木」はイスラエルに対して一般に用いられていた名称である。例えば、詩編 80編9～16節を見ていただきたい。^[70] 新しい神の民は、イエスにあって現実となった。この言葉はすでに1章51節にあり、そこで人の子は、創世記28章12節^[71]によると新しいヤコブとして、叙述されていて、創世記32章28節で「イスラエル」と改名した。

パウロの場合、キリストの体はすべての手足を結びつけているように、キリストは新しいイスラエル-ぶどうの木であり、すべてはその枝に結ばれている。しかし、この選ばれた比喩・Bildwahlは、違いもまた示している。実際に二つの比喩が語っているところによると、キリストの内にだけある個々のいのち、また彼から贈られ

たいのちを見ることができる。しかし、一方では体の手足によって他に仕えるが、ぶどうの木の枝葉は他に仕えるということはない。このことはヨハネによる福音書の比喻に当てはまる。羊はほかを助けない。種はほかを助けない(10;1-30、12;24)。だが、キリストのことを直接に伝えているように、ぶどうの枝、羊、そして小麦は、まったくぶどうの木と羊飼いと穂に依存している。

7.2 職務を見うしなった 教会共同体か

同時に、例えば組織された奉仕と組織されていない奉仕とのちがいは、目に見えるようになっていない、ということが次に関連している。職務の全権はユダヤ教の祭司長とローマの総督が持っていて、二つの場合が強調された(11;51、19;11)。ユダもまた一つの職務をもっている(13;29)。そして、ヨハネによる福音書における敵対者はおそらくヨハネの第三の手紙の「ディオトレフェス。彼はあなたがたの間で一番でありたがっていて、私たちを受け入れない」。そう、「そのために受け入れようとする人を妨げて、教会共同体からしめ出している」(10節)。

残念ながら 歴史的状況はわかりにくい。ヨハネによる福音書の教会共同体はおそらく、移動する預言者たちによって造られたカリスマ的な集団である。彼らはいつも強い制度的教会に反対し、その中でディオトレフェスは君主的な監督職を得ようとしていたか、またはもうすでに手に入っていたのか?^[72]

ヨハネによる福音書の教会共同体は、「異端の」監督に対して身を守ろうとする大教会の一部なのだろうか?^[73]あるいはそれにあたる長老は君主制の立場を得ようとしているのだろうか。またディオトレフェスを保守的に考えているのだろうか?^[74] そのあとには何が歴史的にくるだろうか。個々のテキストでは、職務の委任を要求して戦っている。その時、ヨハネによる福音書の教会共同体は、殆どショックを与えるやり方で、すべての人が聖霊に信頼し、自分をその導きにすっかり委ねるようにと、ヨハネの手紙一2章20節、27節に示している。

あなた方は聖なる方から油を注がれているので、みんな知っている。^[75]・・・あなた方は誰でもいつも教えられる必要はない。あなた方の油はあなた方に全て教えているように、それは真実でありうそではない。これが新約聖書において、この方向で最大限に示す事ができる全体である。

7.3 新約聖書の新しい可能性

これはヨハネによる福音書の記事のなかで、イエスが別れの説教で彼の弟子たちに約束した事にもとづいている。弟子たちの全員は、将来のイエスの信者が描かれている。ヨハネによる福音書15章9-15節にある愛の掟は、彼らには、特別な全権委任だけでなく、ヨハネによる福音書20章22節以下にある罪の赦しの委任が同じくらいある。それは、ぶどうの木の枝として話しかけられている(15;1-8)ように、有効である。6章70節にだけ、そして伝統的な様式においてのみ「12人の中の一人」(20;24)は、それが12人に与えられたことを明らかにしている。ところで、12人のリストにない、それ以外と思われるナタナエル(1;45-49、21;2)と、「弟子と呼ばれないで、イエスが愛する人」も、弟子に属していると思われる(上記1.3)。これら弟子仲間は「援助者」を送ると約束された。^[76] それについてはヨハネの手紙一2章7節で次のように言われているように、ショックなもので、彼は「あなたがたを真理に導く、真理の霊である」と約束された。では、なにか今日のクウェーカー教徒のように、今も霊の言葉を待っている教会共同体だけが生きているというのか? ヨハネの第一の手紙の著者は、第二の手紙、第三の手紙の「長老」^[77]を、疑いもなく権威と同一化したもの、または形式的なものとして使っている。ヨハネによる福音書21章20-23節は、平行記事のなかで、それに対してペトロがしていることを示している。それは「公に正式なものと認められる」のではない。按手によってでも、称号授与によってでもない。ここに、ほかの全てより強い、教会共同体の兄弟姉妹の関係があらわれている。もちろん教会共同体も、そのように生きるという保証があるわけではない。牧会書簡の按手が、どのよ

うに教会共同体を支配し（上記6,5）、また同時に教会共同体のキリストのかたちを破壊するか、それはカリスマ的指導者も、霊にとりつかれた人も同じであり、「あなたは木の葉がざわざわと音を立てるのを聞く。しかし、それがどこから来てどこに行くのかを知らない。」（ヨハネ3;8）それゆえに、ヨハネの手紙第一がもう一度そのテキストのなかで強調し、2章20節と27節で強調する文脈の中で、霊は「はじめから」、すなわち使徒の基礎的宣教のなかで教えてきた他にはなにも教えていないということを強調する（2;24）。新約聖書の、終わりの時に示されている将来についての新しい可能性は、例えば、按手による職務そのものにあり、その教会は常に預言者の指示を優先させる教会である（6;5）。また基礎的な使徒の証言（7;2-3）によって区別され、聖霊の導きに全く信頼する教会である。

二つの側面は来るべき教会で評価されるべきである。その時互いに異なったものに強調をおくことも評価される。

7.4 宣教する奉仕

ヨハネによる福音書は別れの説教の中で、イエスの戒めを次のように記している。「父が私を愛したように、私もあなた方を愛する。私の愛のうちにとどまりなさい。私があなた方を愛したように、互いに愛しなさい」。その際はっきりと「友のためにそれを与えるほど完全な愛はない」（15;9、12以下）といわれた。ヨハネの第一の手紙について、これはイエスの古い戒めであり、今、もう一度新しく言われなければならない（2;7-11）。兄弟愛はイエスに属している事の基準である（3;16-24）。キリストによってすでに成し遂げられた現実（上記2.1）の中で、次の観点を固定することが特別に強調される。即ち、愛はイエスにおける神の愛である（3;16、4;7-1a）。このことはもう一つのパウロの宣教モデルへと導く。彼の場合、教会共同体は少なくとも遠心的に伝えられている（上記6.4）。ヨハネの場合、それもたしかに一面的に言われているのであるが、教会共同体は求心的に言われている。兄弟愛によって満たされる特定の

新しいグループが、そこでは、イエスによって構成を与えられた共同生活が何であり、それとともに何が共同体に役に立つ構想を提示しているかを世界に示す（ヨハネ17;18-23）ところの、新しい社会と新しい世界の手本となる。

7.5 言葉だけでなく実行する奉仕

実践的で、具体的になされる、そのような兄弟愛は、ヨハネの手紙一3章17節以下に「私たちが神を愛したのではなく。神が私たちを愛した。ここに愛がある」（4;10）と書かれている。そのように真理が厳しくとどまる、とある。この言葉は、時には、まさに極度の妨害者が、そのような愛の最良の証人となりうることを、また、同時に、それが最も重要な宣教でありうるということを、もう一度思い起こさせる（上記1.3）。「実行するキリスト教」であることを忘れないならば、ヨハネの奉仕は、まさしく「言葉としてでなく、行いと真実の中に」（1ヨハネ3;18）、イエスの洗足が本当に、具体的に、示しているように、最大の重要性を与える（上記1;1、2;3、5、3;1、4;6）といえる。

注

- [1] 「ホス」は、「どのように」または「として」を意味する。第一の場合は27節以下にある。イエスは、食卓のそばで給仕をする奴隷のようである。この言葉は本来これらと結びついていないことを伝える。一方「ホス」はイエスをこの機能を実行するものとしてあらわしている。いずれにしても給仕する奴隷の比喻は、状態ではなく動詞のかたちで、しかも行なうことを強調する際に用いられる。
- [2] J.Roloff,「イエスの死の救済論的意味の起源」(マルコ10;45とルカ14;27),NTS19,1972/73の中38頁以下:62;J.Fitzmyerの議論,「ルカによる福音書」(AncB28a),1986,1411頁以下
- [3] A.Schulz,「服従と模倣」(StANT6),München1962,252頁以下
- [4] J.Roloff,上掲書(注2),51頁と55頁以下
- [5] 私は19節と20節は本来、ルカのいくつかの写本の中にある削除部分は試みのひとつであって、二つの杯の困難は取り除かれるとおもう。
- [6] J.Roloff,上掲書(注2)60頁以下;洗足について下記7.5
- [7] 彼はエルサレム住人の可能性がある。E.Ruckstuhl,「福音宣教の地平におけるイエス」,Stuttgart 1988,369頁と372頁(=SNTU II 1986,144と146)または、それにたいする偽名「ヨハネの教会の伝統」(zu H.Thyen,同じく、361頁以下参照;更にB.Bonsak,3.ヨハネの手紙の執事とヨハネ福音書の愛弟子に対する偽名でありうる。ZNW79,1988,45頁以下,60頁以下)
- [8] マルコによると弟子たちは思慮のないままである。8章17節にあるのは預言的なもののしりの言葉であり、この言葉は4章12節以下の「外の人たち」に言われている。8章33節に、ペトロはサタンとして退けられている。マタイの場合、彼らは「信仰の薄いもの」であり、「小さい者」である。(下記5.1)。ヨハネによると2章22節、12章16節で、弟子たちはイエスの言葉の地上の有効性を理解していない、そして13章36~38節によるとペトロは彼を根本的に誤解している。
- [9] L.de Lorenzi,(同じ出版),「タルソのパウロ」(Ben.serie monog, section paul.1),Rom1979,424「仕える者ディアコノス」としてのパウロについての弁論は、24節と29節において彼の苦しみと戦いを二つの示唆によって、注目している。
- [10] E.Schweizer,「コロサイの信徒への手紙」(EKK12),Zürich 3.1989,81頁以下
- [11] 20章4節に、殉教者だけが千年王国によみがえる。信じないでいる「残された死者」は(5節)、まだ議論の余地がある。
- [12] U.Bachもまたそう言っている。足元には何もない。一致団結したディアコニーについての論述。Göttingen 1980,48頁以下
- [13] この未完了過去形は、イエスの訪問を超えていく?絶え間ない活動(4.6と比較)を示唆している。よく引用される
プラトンの文章「だれかに仕えなければならぬ人はいかに幸福だろうか?」(ゴルギアス491e)
- [14] このことは13,35-38に繰り返されている、ペトロは十分に用意しているところ。イエスが殉教の死に至るまで仕えている、だが、彼はまずまず第一にイエスの奉仕を気に入るようにさせなければならないということを理解していない。それについてChr.Dietzfelbinger,偉大な業(ヨハネ14章12節以下,NTS35,1989,32頁以下参照
- [15] U.Bach.J.Moltmann「神の国の地平におけるディアコニー」Neukirchen-Vluyn 1984,95t.
- [16] P.Philippi「ディアコニカ、社会的次元を超えて、教会の責任として」J.Albert,Neukirchen Vluyn出版1984,6.17同所4
- [17] 同所4
- [18] 上記注5
- [19] 最後の晩餐の制定を伝えるほかの福音書の知識を、福音史家が彼の読者に前提しているということをP.Philippi,上掲書(注16),と共に前提できる人は殆どいない。
- [20] 議論されていることは次のことである。1)洗礼と最後の晩餐の思いがけない順序についての教えにも関わらず、わき腹から出た血と水の流出かどうか。2)次のことについての示唆かどうか。すなわちイエスは足を折られてはいない。

過ぎ越しの子羊(出エジプト記12,10.46)が意味しているように、(共観福音書に対してヨハネ福音書18章28節と19章24節によるイエスのように) 過ぎ越し祭の前日の午後殺されている。またユビラ49章13節以下も同様に「イスラエルは足を折られない」ということのしるしである。または詩篇34編21節によると苦しむ義人についてだけいえるしるしである。(上記C.H.Dodd, 「第四福音書註解」Cambridge1953,233頁以下)

[21]「(場,集会)共に集まることについて」(synerchesthai epi to auto:コリント一7章5節、11章20節、14章23節;比較.II,18.33;14,26) または、「自分で集会に行く」(synagesthai:使徒4章31節、14章27節、15章6節、20章7節以下)は神礼拝の集会に対する新約聖書の名称である。

[22]一人の指導者を組織の創立者から任命することとは、自然で可能であり、意味深いことでありうる。しかし、決定的なことは、それがすでに与えられている場合に、彼は言及されないということ、また、何の尊敬も受けていないか、権力と結びついていることである。

[23](Sym)mimeisthai(「共に」倣う)とmimetes(模倣)は、例外なく人間又は人間的態度を引き合いに出している。ほかに1テサロニケ1章6節、そこで「そして主の」がつけられている。そしてコリント信徒への手紙一11章1節、そこで、コリント人が見習うべき使徒、自ら「キリストに倣う」使徒

[24]Chr.Dietzfelbinger,上掲書(注14)27頁以下

[25]特にH.Schürmann,による、例えば:「イエスの死の理解、彼の理解した範囲での、その環境で理解した範囲で」,ThGl 70,1980,156

[26]それはそうでもテモテの第一の手紙5章5節に、寡婦について言及されている。

[27]E.Schweizer,「新約聖書における教会と教会の秩序」(AThANT 35),Zürich 21962 154頁以下

[28]H.W.Beyer,「ディアコネオー」の項目, ThWNT 2,82頁以下と91頁以下

[29]英語では「ミニストリー」は自由なまた職務と職務上の奉仕に似たものを含む

[30]K.Stalder「キリストの現実経験」Zürich 1984,14.

[31]J.Roloff「テモテの第一の手紙」(EKK 15), Zurich.1988,171頁以下,その際「監督」は世界的な用語である。一方「ディアコン」はキリストの言葉からキリスト教で説教された

[32]それに対してはG.Schilleの貢献を参照されたい。

[33]よりくわしくはR.VoIkl,の「隣人愛」キリスト教宗教の総体?」M.Manderscheid,Freiburg 1987, 59頁以下

[34]N.Walter,「使徒言行録6章1節とエルサレム原始教会の起源」NTS 29,1983, 370頁以下

[35]L.de Lorenzi,上掲書(注9),432 教える事と話す事という二つの広い意味での言葉の賜物があるので一般に、言葉における奉仕という意味でも理解する。

[36]マタイは10章1節で弟子たちに与えられた委任について、4節は前からイエスについての報告を、繰り返している。

[37]それについてはJ.Rohdeの著作における貢献を参照されたい

[38]E.Schweizer,上掲書(注27)75頁以下にすでに述べている。

[39]J.Roloff,上掲書(注31)170頁以下に述べている。

[40]K.Stalder,上掲書(注30),16

[41]W.Jannasch,「ディアコニー」の項目, RGG3 2,160頁以下

[42]重要な本文伝承(46頁)を、eti (まだ) ei ti (いつ[ihr] なにか [～にかけて努力する])の変わりに、と読むことができる。というのは、kath'hyperbolen (～に関して、際立った)が副詞的にあるからである。だが、自ら何も存在しないものになる。

[43]ローマ12章9節a愛への招きはまさに賜物の一覧表と、具体的な奉仕の展開の間にあるからである。1コリント13章はもともと12章と14章の間にあったのではない、場合によってはパウロのものではない(H.M.Schenke/K.M.Fischer,「新約聖書文書の手引き」,Berlin

1978,93頁以下と注3)ということは、ありそうにない仮説である。というのは、ロマ12章9節a愛についての呼びかけはまさに賜物のリストと奉仕の具体的な発展の間にあるからである。

[44] R.Völkl, 上掲書(注33)61頁以下で、テモテの手紙一3章1節もおそらく男の奉仕者と結婚した婦人の奉仕者に言及している。上掲書

[45] K.Völkl, 同じ所に、それはまれに神への愛として、また、たびたび隣人に対する愛として言及されている事に注意している。

[46] ルカ17章2節！にある付加文は欠けている。

[47] ここはルカ17章1節以下にあるように、宇宙的つまりきについてのQの言葉と関連している。

[48] この言葉はマルコ9章41節に平行記事がある。また9章42節は躓きの言葉の前の節と平行している。マタイ10章40-42節の短い断片は、その由来となった弟子の教えであるQ資料に倣っている。その平行記事をルカ10章16節にもっているQに由来する弟子派遣の教えの終わりに置かれている。

[49] キリスト教宣教だけの関係(J.Friedrich, 「兄弟の中の神」[CThM 7], Stuttgart 1977, 248頁以下302:復活後のまたマタイの理解、イエスとの相違における E.Brandenburger, 「世界正義の正しさ」[SBS 981, Stuttgart 1980, 129頁以下、マタイ25の第一段階に帰る、は信じられない) キリスト教宣教についてのみ、関係は、信じられない。というのはこれは私の最もすくない兄弟、だが「小さい者」ではない、とりわけイエスに対して、この人たちがした奉仕を裁判官は全く知らないからである。

[50] U. Luz, 「マタイ福音書における弟子」ZNW 62, '97', 141頁以下、弟子たちはマタイのもとで歴史的にイエスに従うものである。しかし、同時に弟子たちに対していつも分かりやすい。

[51] F.Büchsel, 「デオ」deoの項目, ThWNT2, 59頁以下; 同様に: J.D.M.Derrett, 「結び、開く」, JBL 102, 1983, 112頁以下、罪の赦しは書かれた教えの全権委任に入っていない事を強調する。また世界的な Dorfältesteによる離婚訴訟の決定等々を思い起こす。

[52] J.D.M.Derrett, 同じ所に, 16

[53] 15章15節、17章24-27節、18章21節、ペトロは改心する。マタイ21章20節、28章7節(!) マルコに比べて特別には呼ばない。明らかにペトロは全ての弟子たちの名によって語っている。(15章16節で、イエスは彼らに答えている)、そして14章28節以下でペトロは特別な役割を演じている。

[54] 11節とともに三人称で、弟子たちに直接語られた教えの中で変化する。

[55] M.J.Suggs, 「知恵、マタイ福音書におけるキリスト論と法」Cambridge/Mass 1970, 122頁以下; 詳細はE.Schweizer 「マタイと彼の教会」(SBS71), Stuttgart 1974, 43f.

[56] これは(マタイの理解として)認められるべきではない(E.Schweizer, 同所.152注39).

[57] G.Bornkamm, 「マタイの教会における、結び-開く権力、その歴史と信仰2」, München 1971, 37頁以下教会の規律の力について、ペトロの異なる教えの権威。これは特別のアクセントを正しく置いている。それに対して18章18節における中性形「いつも解かれるもの・・・いつも解かれていないもの」、(A.W.Argyle, 「マタイによる福音書」[CBC], Cambridge 1963 z. St.を参照されたい)そして、とりわけ両方の場所で否定的に用いると同じように肯定的にその表現を使用している

[58] それについてU.Luz, 「マタイによる福音書」(EKK1-1), Zürich.1985, 182頁以下他

[59] そこで、17節は、しかし、18節ではゲネタイ(生ずる)と解釈されている。

[60] 恐らくマタイの編集になる新しい版

[61] U.Bach, 上掲書(注15): パウロのキーワード「キリストの体」は今も私を魅了する。多くの具体的なディアコニーの問いは「新約聖書の教会における」でU.Luzによってすでに語られている、「新約聖書における教会とお金」, W.Lienemann(出版)のなかに「教会の財源」, München 1989, 525頁以下、特に「パウロと牧会書簡」, 541頁以下

[62] ガラテヤ書3章28節はまた「男と女」と名づ

- けている。パウロがここを省いたのはそれがコリントでは明らかであったからかどうか(G.Sellin「コリント信徒の手紙—の主要な問題」ANRW II 25,4,1988),または、彼が慎重になってしまったからである。あきらかになっているかもしれない。1Kor14,34fは(平行記事11,5!)後期の註解にある。
- [63] M.Buberはかつて次のように言った「イスラエル人は最初に森を見た、そのとき、個々の木を度外視した。一方西ヨーロッパ人は木がいっぱいあるのを見て、大きなかたまりを「森」と名づけた。
- [64] E.Schweizerによるすべての証拠資料,「本性・新約聖書におけるイエス・キリスト」TRE 16, 1987, 690頁以下
- [65] コリント信徒への手紙—12章21節、頭は一つの手足の頭である。
- [66] 最初の讃美歌のなかで、世界の体全体が思われた、また教会についての説明が欠けていた
- [67] 「パウロと牧会書簡に近いすべて」E.Schweizer,「新約聖書におけるカリスマと職務の概念」T.Rendtorff(出版)「カリスマと制度」Gütersloh 1985,320頁以下。
- [68] U.Luz,「カリスマと制度、新約聖書の視点から」福音主義—ルター派教会雑誌、テュビンゲン40,1987,156、また EvTh 49,1989,85.のなかにある
- [69] 詳細はE.Schweizer,「新約聖書における神学入門」(GNT2z)5,7
- [70] ギリシャ語テキストのなかで、かれは18節で「人の子」と同一化している。ユダヤ教の文書には、イスラエルはぶどうの木について次のように言っている。根が深いところに達し、枝は神の玉座まで伸びる。(LibAntiz,8)。
- [71] ユダヤ教の解釈者はテキストを、天使がヤコブの上に(はしごの上ではない)上り、下りすると考える。(創世記28章12節は、ヨハネ1章51節のようにこの順序になっている!)
- [72] そのように、A.v.Harnack,は「第三ヨハネについて」(TU15/3),Leipzig1897に書いている。その時E.Käsemannは「異端者と証人」,

ZThK 48,1951,292頁以下= 同じく「釈義的試論と意識」 1,Göttingen 1960,168頁以下と、dem Nachtrag Bd.2,1964,133,注1

- [73] W.Bauer,「古代キリスト教における正統と異端」Tübingen2 1964,96頁以下
- [74] J.W.Täger,「保守的な反逆者」,ZNW78, 1987,267頁以下
- [75] もう一つの写本によると「すべてを知っている」
- [76] ギリシャ語:パラクレート、語幹は「慰める、呼び寄せる」を意味している。だが、形は受身の意味をもっているので、「呼び寄せられる」という意味だけ、また「援助」と理解できる。
- [77] 実際には(職務や称号なしの)精神的権威のしるしであった、それは使徒の時代からきている。パピアス(Euseb, KG III 39.4)それはまた(使徒から区別される)ヨハネの長老を数えている。

解題

本文は、「ディアコニー 聖書的基础と手引き」(ハイデルベルグ大学ディアコニー研究所発行、旧約聖書、新約聖書ほか様々な分野から17人の学者の論文が集められたもの)のなかから新約聖書学者エドゥアルト・シュヴァイツァーの「新約聖書の教会共同体のディアコニーの構造」を訳した。Eduard Schweizer:Die diakonische Struktur der neutestamentlichen Gemeinde Diakonie-biblische Grundlagen und Orientierungen : ein Arbeitsbuch zur theologischen Verstandigung uber den diakonischen Auftrag / Hrsg. Von Gerhard K.Schafer und Theodor Strohm -3.Aufl.- Heiderberg :HVA,1998 (Vroffentlichungen es diakoniewissenschaftlichen instituts an der universitat Heiderberg B2) ISBN 3-8253-7094-1

訳語解説

ディアコニー 2.1他7、奉仕と訳したもの25

Diakonieを奉仕としたが、それは一般的な奉仕ではなく、キリスト教会で制度化され、監督や執事、教師、預言者のなかに並んで位置付けられていく過程を本論文は論じている。現在のドイツで、福祉事業の多くを占めるキリスト教事業はカトリックの「カリタス」とプロテスタントの「ディアコニー」に大別される。そのディアコニー事業団が育ててきた人材と組織には学ぶべきものがある。特に理念を問われる事の多い日本の福祉事業にとって学ぶところがある。日本におけるディアコニーはルーテル派の宣教師がディアコニッセ（奉仕女）とともにもたらし、明治期のハンセン病患者のために働いたリデル女史などが知られている。

グノーシス 6.2

1世紀のローマ帝国周辺に興り、2-3世紀に最盛期を迎えた一思潮。グノーシスという名称は知識・ギノスコーからでたもので、人間を救済に導く究極の知識を主張する。グノーシス神話によると神

と合一する自己の発見によって救済の知識を得る。その特徴は善悪二元論にあり、地上世界を悪とし、人間の身体も悪に属する。その魂は神からで地上と世界に対立している。エデンの園の話を解釈してとりこみ、蛇は人間に知識を授けた恩恵者であり、創造者は抑圧者であると批判する。

ロゴス 言葉 6.2

聖書における神の言葉は天地を作り、作られたものは命を宿す。イエスの言葉は病を癒し、悪霊を追い出す力をもっていて、人を救いに導いた。このような言葉をロゴスという。

ストア 6.2

アテネでゼノンがおこした哲学の一学派である。世界をロゴス(理性)の法則によって支配された統一体とみた。ローマ皇帝ネロの教師をしたセネカにみられるように禁欲的性質をもっていた。

Gemeindeは「教会共同体」と訳した80回出てくる。Kircheは「教会」と訳した17回

Gabeは「賜物」と訳した16回、charismaは「賜物」と訳した〔カリスマ〕6回

引用句は一部を除いて新共同訳を用いた